

日比谷公園で鉄棒するひとたち  
—— その行動の意味を考える ——

福 地 豊 樹

**People who perform a horizontal bar in Hibiya Park:**  
Think about the meaning of that action

Toyoki FUKUCHI



# 日比谷公園で鉄棒するひとたち

—— その行動の意味を考える ——

福地 豊樹

群馬大学教育学部保健体育講座

(2017年9月27日受理)

## People who perform a horizontal bar in Hibiya Park: Think about the meaning of that action

Toyoki FUKUCHI

Department of Health and Physical Education, Faculty of Education,

Gunma University Maebashi, Gunma 371-8510, Japan

(Accepted September 27th, 2017)

### I はじめに

2004年の夏、東京日比谷公園で鉄棒をする奇妙な大人たちの映像がテレビ<sup>1)</sup>から配信された。

谷 啓さんが進行役となり、鉄棒に関わるサラリーマンたちの物語が映されてゆく。毎朝、または昼に日比谷区のほぼ中央にある公園の一角に集まるひとたち。懸垂10回10セットを目標にうなり声をあげながら鉄棒に向かうひと。大振り上がりに挑戦するひと。鉄棒をヤスリで磨き、逆手車輪を楽々とこなすひと。我が子にカッコ良い父親の姿を見せようとするひと。それぞれの物語は、素直に面白と感じられた。同時に、何がこのひとたちを突き動かしているのだろうかという疑問も生じていた。

皇居の外周を走るランナーたちの話題は、多くの人の周知のところである。通りを隔てた日比谷公園のこのような出来事が話題にのぼることもしばしば、あるようである。しかし、多くの情報は、このサラリーマンたちを面白おかしく扱ったものであった<sup>2)</sup>。

本稿では、この現象を取り扱う問題意識について、まず触れ、次に、その実態を明らかにし、さらに、これらの行動の意味を考えてみたい。私の調査は、2014年に始まったが<sup>3)</sup>、2004年のテレビ放映の映像は、大学の授業、教員の更新講習で利用しており、その間に、蓄積された映像視聴後の感想文類も資料として活用することとした。

### II なぜ鉄棒なのか

鉄棒は、学齢期の子どもたちが学校の体育の授業で行う「器械運動」の教材のひとつである。多くの学校の屋外運動場に設置されており、その用途は自明のものである。低学年用の低鉄棒から高学年用の高鉄棒まで、設置形態は様々である。低鉄棒は、地域の児童公園等にもかなり設置されており、そこで遊ぶ子どもたちの姿も想像することができる。さらには、鉄棒は「体操競技」の一種目としても、オリンピックや世界選

手権の映像を通して、知られるところと思われる。日本人選手の体操競技のこの種目での活躍やその出来栄は、世界的な評価が高いものとなっている。

学校における鉄棒の学習は、器械運動の学習内容として、小学校から中学校、高等学校まで、主要な運動領域として、学習されることになっている。しかしながら、器械運動の授業に関して、先生方や子どもたちの関心の程度は、あまり高くはないのが現状である。低学年では、マットやとび箱、鉄棒、平均台を使った運動遊びが工夫され、様々な実践が蓄積されてきたが、学年の進行にともなって、技術的な様相が強まると、技の出来不出来に明確な差が生じ、苦手意識を生じさせる傾向が生まれる。いわゆる得意な子とそうでない子たちの二極化が生じ、学習形態や指導法の工夫にも関わらず、器械運動嫌いの子どもたちを生みやすいものとなっている。鉄棒では、自分の身体を支えたり、ぶら下がったりすることで、腹部や脚、手のひら等の特定の身体部位に多くの負担がかかり、運動の実施を難しくすることが、授業の遂行の障害となる傾向にあると言える。

このような中、教師の指導技術や教材自体の理解もなかなか進まない現状にある。学齢期の他の学習内容、例えばサッカーやバレーボール等の球技種目などと比較すると、学習の興味付けが難しい教材と言え、さらには、学齢期後に実施するスポーツ（運動）としては、あまり想定されていないと言える。

しかるに一方、東京のサラリーマンたちは、なぜ、鉄棒に取り組んでいるのか、執筆者にとっては、この事実は驚きであり、なぜという素朴な疑問が残った。

### Ⅲ ある日の日比谷公園の鉄棒の実態<sup>4)</sup>

以下に、公園のサラリーマンたちの行動を見ることにしたい。観察は朝と昼、それぞれ別の日であり、執筆者のフィールドノートに書き取った動きを出来るだけ忠実に記述し、再現したものである。記載された時間はあくまで目安としているにすぎない。

#### 1 2014年3月28日(金) 朝<sup>5)</sup>

7:35

日比谷公園に到着。すでに、Aさん、Bさんのお二人が来ていた。ご挨拶をし、しばし見学。Aさんとお話をする。合気道をしており、今日は自転車で来た。自転車のスーツ姿で、シャツの胸には「A」の名前が入っている。驚くほど厚い胸板。自転車で、走る時は数十キロに及ぶという。下肢の筋肉を見せてくれる。すごいもりあがり。とても、74歳とは思えない。Aさんは、もっぱら吊り輪を行っているようだ。吊り輪を大きく振動させながら、逆位の屈伸姿勢で振動にタイミングを合わせている。これをマスターするには、時間がかかるという。確かに、上手にやっている。(写真1を参照)

Bさんは、高鉄棒で懸垂と腕屈伸の振動技を行っている。

少しして、若者Cさんが参加。Dさんの会社の同僚で、紹介されたという。胸板が厚く、とても良い体格の若者。

8:05

次第に人数が増え、7名から8名 (E・F・G・H・I・J・K・・・)。



写真1



写真 2



写真 3

それぞれが自分の決めた運動を行う。Aさん、Eさん、Fさん、Gさん、Hさん、Iさん・・・。(写真2~4を参照)

8:17

さらに若い人が加わり、13名になる。Aさん、吊り輪の振動。若い人、プロペラまわりを行う。みなさん、それを見て、新しい技だなどほめる。Fさん、地面で伸腕屈身力倒立。倒立がきれいだ。さすが、体操経験者。Eさん、腕を屈めた状態でスイング(得意技のよう)。

Fさん、懸垂姿勢から下肢をあげる運動。

Mさん登場。体操を行い、懸垂。Dさん登場。上半身はだかになり、いきなり腕屈伸、数回。吊り輪、スイング。背面姿勢で、腕屈伸。

Fさん、伸腕屈身力倒立、倒立、ブリッジ、起き上がり、片足曲げジャンプ、前後開脚ジャンプ。

Bさん、出勤。「イッテラッシャイ」の挨拶。

8:30

出勤する人多い。思い思いに出社。

Aさん、自転車で帰る。お礼のご挨拶をした。みな、「イッテラッシャイ」のかけ声。

8:38

残るは4名。Mさん、Eさん、他2名。

今日は参加が多い日だった。通常は6~7名。(Eさん談)

8:50

残るは3名。Mさん、Eさん、他1名。



写真 4

Eさんは、砂場の木の縁に片足を乗せ、バランスをとりながら膝の屈伸運動を行う。片膝ずつ。平均台の上で行っているような感じだ。その後、鉄柵を利用し、スイングを行う。(写真5参照)

8:54

残るは、Mさん、Eさん。Mさんは懸垂、体操を続ける。Eさんは鉄棒にて屈腕のスイング。それぞれのペースで続ける。

8:58

そろそろ時間だとEさんが言う。Mさんも片付けにはいる。

9:00

Mさん、出社。この間、別のスーツ姿のサラリーマン3名が、思い思いに鉄棒にぶら下がり、挨拶をして、去ってゆく。

9:03

Eさんと一緒に、公園を出、挨拶し、別れる。



写真5

以上がこの日の朝の約1時間半の様子である。執筆者のはじめでの観察であり、フィールドノートへの書き込みは十分とは言えなかった。書き落としたこともあった。時間内に13名とあり、人数を数えたいことが分かるが、終わり近く、また数人のサラリーマンが加わっている。前日に顔を合わせたひとのうち、判別可能であった方々の行動に関心が行き、全体の観察が疎かになった感がある。しかしながら、いくつかの特徴を見出すことができた。ひとつは、集団の中で中心的な役割を果たすひとの存在であり、Aさん、Eさんが相当する。恐らく、少しずつの参加で顔見しりになり、挨拶を交わすようになったことが推測される。ふたつには、何を行うかということに関して、技術的な運動(わざ)を行うひとと、懸垂に代表される力運動を行うひとに大別されるということである。この点は、NHK放映のドキュメンタリーでも、読みとることができたことがらであった。みつつ目は、その運動の課題は、自分の好みに合わせて行われるということ、だいたいひとには自分自身の課題があり、動ける時間も含めて、その実践を行い、次の仕事に向かうということである。加えて言えば、参加時、退出時に、すべてのひとたちではないが、挨拶の言葉をかけ合うことが言えそうである。Aさんは、運動を終えて仕事場に出勤するように、「行ってらっしゃい」と言葉をかけていた。後に判明するのであるが、Aさんは、この場での鉄棒歴が何と、47年<sup>9)</sup>という最古老の方であった。次に、別な日の昼の様子を記したい。

## 2 2014年7月31日(木) 昼<sup>7)</sup>

11:43

一人のサラリーマン登場(以下Aとする)50歳くらいのひと。余分なぜい肉はなく、頭髪は短め。まず、動ける準備をし、高鉄棒にぶら下がり、脚上挙気味で懸垂数回実施。自分の調子を見ている感じ。荷物を置いたベンチにもどりシャツを脱ぐ。手首には紺色のリストバンド。ベンチで少し休憩。

11:50

ベンチで腹筋を数回。続いて、腕立て20回。伏臥になり、背筋(上体起こし)を数回実施。高鉄棒へ移動、逆手懸垂を実施。先ほどと異なり、左右交互に引き寄せる。ベンチにもどり、ベンチ上で頭を支持点とし、腰を上げ、くの字姿勢で、首を鍛えるような動きを行なう。その後、ベンチ上でブリッジ、同じく首を支持点として、首を鍛える動きをする。(＊レスリングの選手が行なうトレーニングのような印象をうける。8))

次にぶら下がり器を利用し、片手懸垂を数回。その器械を利用し、手で身体を支え、ブリッジ。続けて、その反対の動きとして、十分な前屈動作。これを数回繰り返す。

11:55

さらに一人加わる。60歳くらいのひと（以下B）高鉄棒で懸垂を2,3回行なう。水道で手を洗う。Aさん、鉄棒の支柱を利用し、踵の上げ下げを行なう。その後、懸垂、頭を前屈し背面に引き寄せる。吊り輪に移動。腕を左右に広げ、肩の伸展、背の伸展動作をゆっくり行ない、脚上拳姿勢で懸垂（腕を曲げ）し、脚を左右に振る運動。その後、逆懸垂姿勢、脚前拳、肩倒立、十字懸垂姿勢を経過し、下りる。（\*体操経験者のようにも思える。）

12:03

Aさん、高鉄棒の支柱を利用し、脚を上部に上げ、開脚運動。懸垂5.6回、同じ懸垂姿勢で、左右横に引きつける運動を行なう。その後、吊り輪の支柱を利用し、腿のストレッチ、斜めの支柱を利用し、登り棒のように、腕だけで、登る。鉄棒に移動。懸垂姿勢で下体を上げる腹筋運動を数回行なう。水道で手を洗い、汗をふく、身支度をする。

12:06

Cさん登場。（\*挨拶をする。覚えていてくれたようだ。）Cさん、シャツを脱ぎ、ランニングとステテコ、白のパンツに履き替える。

12:08

Aさん、挨拶を交わし、帰る。

12:10

Cさん、ウォームアップ。少し足を開き、両手を合わせ、上体を前後、左右にゆっくりとストレッチ、脚のストレッチ。Bさん、鉄棒の下の砂場をスコップ（\*園芸用の小さなもの）で掘り返す。やわらかくしている。

12:12

Dさん、Eさん加わる。Dさんは何もせずにすぐ帰る。Eさん、40~50歳代のひと。ストレッチ後、ぶら下がり器で懸垂姿勢、両足を歩くように動かす運動。ぶら下がり、少しの反動を付ける運動。その後数回の懸垂。

12:15

Cさんも、砂場を掘る。F、Gさん加わる。GさんCさんと会話。Fさん、ベンチでブリッジのストレッチ。その後、ぶら下がり器で懸垂。Bさん、石製のベンチの上で、倒立静止。（\*かなりきれいな姿勢で、しっかり静止している。）Cさん、高鉄棒で懸垂振動数回行なう。Hさん加わる。F、Hさん、それぞれ、ひとりでもくもくと懸垂。Cさん、高鉄棒で膝かけ懸垂振り、数回行なう。（\*かなりの振幅で、かなりの熟練度。）Gさん加わり、高鉄棒で懸垂10回。かなりしっかりした腕屈伸。その後、ベンチを利用し、背伸ばし。Iさん加わり、ベンチで背を伸ばすストレッチ。Bさん、高鉄棒にて懸垂逆上がり、前転の連続、後転の連続（それぞれ5,6回）（\*ものすごく上手い。）その後、両足かけ懸垂振りから後方回転5,6回を実施。最後に足を解き、半ひねり下り。両手を鉄棒に向けて、持とうとする。（\*かなりの熟練度である。）この間、Cさん懸垂。

12:23

Jさん登場。（\*挨拶を交わす。また学会ですかと聞かれるが、今回は違う旨を話す<sup>9)</sup>。）Fさん、高鉄棒でけ上がり。逆手で懸垂7.8回。

12:25

Jさん、軍手を着用、懸垂を数回実施。姿勢は脚前拳。Cさん 高鉄棒で数回のスイング。Jさん、吊り輪で逆懸垂姿勢。Bさん、高鉄棒で両膝かけ前転・後転の連続。Jさん、吊り輪で逆懸垂から仰臥水平に持ちこむような運動。

12:29

若者3名(K,L,M)が加わり、勝手に懸垂を始める。挨拶はしない。

Jさん、懸垂(脚上拳)を数回実施。Bさん、ベンチの上で倒立静止、みごとに静止。

12:30

Cさん、吊り輪の斜めの支柱を使い、登り棒上下。Bさん 吊り輪で逆懸垂の振動。身体の屈伸反動を使い、次第に大きなスイングへ。その後、懸垂姿勢での振動を行なう。Jさん、懸垂(脚上拳)。Fさん、懸垂。

12:33

若者3名は帰る。Jさん、吊り輪の逆懸垂。Bさん、高鉄棒で後方浮き腰回転の連続>(\*上手い!)Jさん、高鉄棒にて懸垂。

12:35

Cさん 着替え、帰り支度>(\*帰る前に再び挨拶をし、機会を見て、ぜひインタビューをさせてほしい旨を伝える。こちらの連絡先を伝えて分かる。)

12:40

Bさんと話す>(\*Bさんのことは、AAさんから事前に聞いていた。Bさんは、土、日に主に来ているという。)3名のサラリーマン(N,O,P)加わる。ストレッチ、懸垂、ベンチを利用したストレッチ。このうちの一人は、石垣の石を利用して、腕立てふせをかなりの回数、繰り返していた。Bさん、その後、ひとりになるが、高度な技を実施。高鉄棒にて、後ろ振り出しからの巻き付け(車輪の予備動作)、後ろ振り出しから宙返り下り。いくつかの連続技。後ろ振り出し、巻き付けから後方浮き支持回転、後方振り出しから足裏支持回転、そのまま振り跳び下り。後方車輪の連続。

12:50

ほぼ終了 Bさんが最後に残る>(\*Cさん同様、インタビューのお願いをする。)

13:00

公園を後にする。

以上がこの日の昼の人びとの行動であった。約1時間の間に16名の人びと。集まったように見えたひとも含めたが、何もせずに立ち去るひともいた。身体を動かす時間はまちまちであり、短いひとで数回鉄棒にぶら下がるだけから、40分から60分をこなす人までいる。知り合いとそうでないひと、挨拶もするひとしないひとと様々であった。

#### IV 調査の経緯

執筆者の問題関心をここでは記したい。

2004年のテレビ放映がきっかけであったことはすでに記した通りであるが、調査に入るまで、ほぼ10年を費やしてしまった。この間、録画した映像を大学の授業や教員の更新講習で繰り返し見せていた。大学生の反応も興味深いものであったが、何よりも教師達の驚きの反応には、それ以上に引きつけられるものがあった。例えば、拝聴後の感想を以下のように記してくれた。

『体がどう動いているか』について考えたり、疑問に思ったりすることが、日常生活の中で減ってきています。周りの状況や自分がどう見られているのかといった“外へのまなざし”が生活行動・習慣となっています。たぶん、あの人達は、そういった『見られている自分』を意識せずに鉄棒をやっています。だから、はだかなんだと思います。『自分の体が変わってゆく』実感、『できた』という達成感、そういった“内へのまなざし”を持っている。だから活動が続いているんだろうと思います。』<sup>10)</sup>

「純粋に自分の体（心身）を鍛えようと、大人になってからも練習をひたすら継続する姿に心打たれるものがあつた。今まで自分がスポーツだと思っていたものへの取り組みとは、根っここの部分から違っているが、これもスポーツだ。というより、これがスポーツの原点だと目が覚める気がした。」<sup>11)</sup>

「この『日比谷鉄棒クラブ』は特殊な集団ではなく、私たちが忘れがちな『当たり前のこと』（組織の存在意義や他者への配慮）が無理なく行われている大人の集団であるように感じた。目標を持つ人は輝いて見える。」<sup>12)</sup>

このような記述は例外ではなく、ほとんどすべての教師が素直にその驚きを語ってくれた。小学校で体育の授業で鉄棒を教えている教師から、高校の体育教師まで、なぜ、このひとたちは鉄棒をするのかという共通した驚きであった。つまり、学齢期の鉄棒という学校教材が、学齢期からはるか隔たった仕事期に行われているという事実を信じがたいと言うのである。様々なスポーツの中で、ランニングやテニスやバドミントン等ならば、分かるが、鉄棒なのである。恐らく、多くの教師達を悩ませている体育教材のひとつなのであろう。技が出来る、出来ないということに、多くの時間を割き、失敗や出来ないことへの嫌悪感などを自ら味わってきているのかも知れない。そのような傾向が、先生方の感想文からもうかがうことができる。

私自身も大学の保健体育専攻生の専門の授業でも、初等科体育などの専攻生以外の学生の授業の経験からも学生の鉄棒を忌避する傾向を知っており、この教材の教授の難しさも知ってはいるつもりであった。だからこそ、10年の歳月を経た後にも、この人たちを知りたいという気持ちは強まったと言える。きっかけは、2014年3月のとある日の朝、公園に向かい、Tさんに出会ったことからであった。その日は日曜日であったが、朝少し遅い時間に鉄棒の前に立つとTさんが鉄棒をやっていた。鉄棒前にあるベンチに腰掛け、その様子を見守った（ぜひ、声をかけ、話しをと思っていた）。Tさんは、かつてのNHKの番組で紹介されていた懸垂10回連続を繰り返していた。テレビ通りの懸垂に感動しながら眺めていたが、Tさんは、その間、自分で考案したであろう体操をし、息を整え、また鉄棒に向かうという行為を繰り返していた。懸垂後、用意している手帳に何かしら書き込み確認をしていた。運動が一区切りするのを待ったが、その間40分くらいかかっていた。すぐさま、失礼とは思ったが、話しかけ、こちらの意図を伝えた。Tさんは、快くお話を下さり、この後の調査に協力してくれる等、連絡先をうかがうことが出来た。その後、Tさんとは数回のEメール連絡で情報の交換を行い、年度末にある人の送迎会が企画されているので、その会に参加したらと声をかけていただいた。その会への出席で、こちらの研究意図を語り、観察と聞き取り調査を依頼することが出来た。前述の観察は、その経緯の一部である。

## V 何を行っていたのか

前述の観察結果から知ることができたことからは以下の通りである。

### 1 3月の朝に観察された運動

#### 1) 参加者

A：74歳 最古老 1時間近く滞在

B：1時間近く滞在

C：34歳 Dさんからの紹介者

D：転勤が決まり本日最後の参加

E：活動の中心的なひと 約1時間

F：唯一の女性

G・H・I・J・K・L：

M：調査を可能にしてくださった最初の出会いひと 約1時間

合計13名+3名

## 2) 使用した器具と行った運動

鉄棒：懸垂・腕屈伸での振動（スイング）・懸垂姿勢で腹筋運動（下肢の引き上げ）

吊り輪：大きく振り支持姿勢から逆懸垂姿勢・大きく振り屈伸姿勢でタイミングをとる

他の運動：（地面にて）屈伸姿勢からの力倒立・倒立静止・ブリッジ（起き上がり）・鹿ジャンプ・前後開脚ジャンプ・砂場の木杵（縁）を平均台に見立ててバランス・その状態で膝屈伸運動・ブランコを取り巻く鉄柵を利用した屈腕のスイング

## 3) 特徴的な実施状況

この日は、前日に行われたDさんの送迎会の翌朝であり、執筆者の初めての観察となった。朝には、軽い体操後、懸垂や懸垂振動等の運動が多く、技の実施は少なかった。ただひとり体操経験の女性は鉄棒や吊り輪の器具廻りの空きスペースで床運動の動きなどを繰り返して行っていた。鉄棒での懸垂姿勢等、身体の使い方は一見して体操の経験者と分かるものだった。朝は裸で行うひとが多いようであった。

## 2 7月の昼に観察された運動行動

### 1) 参加者

A：マイペース約20分間、ルーティーンのように課題をこなす

B：約60分

C：約40分

D：すぐ帰る

E：単独行動

F：同上

G：Cさんと知り合い、会話を交わす

H：単独行動

I：同上

J：約15~20分

KLM 若者3名：仲間、ちょっとやって、すぐ帰る、関わりなし

NOP サラリーマン3名：仲間ではない、関わりなし、他の人には無関心

ほぼ1時間に、参加者は16名、何もせずに立ち去る人1名、若者3名は仲間、他の人には無関心、後半のサラリーマン3名は別々に集まる、仲間ではない、うち一人は、黙々と腕立てを行っていた。Cさん、Jさんは、前回、知り合ったので顔を覚えていてくれて、挨拶を交わした。Cさん、Jさん、Bさん、Fさんの4人が知り合いのようで、会話を交わしたが、他の参加者は、話すこともなく、自分のやりたいことをやっている。前回（3月28日、観察初回の朝）の時のような、お互いのかげ声による

挨拶は聞かれなかった。

## 2) 使用した器具と行った運動

- 鉄 棒：懸垂（下半身：伸身、脚上挙、脚前挙  
 上半身：両腕の屈伸、左右片腕ごとの屈伸）
- ：懸垂振り
  - ：膝掛け懸垂振り
  - ：け上がり
  - ：懸垂逆上がり
  - ：前転
  - ：後転
  - ：両膝掛け前転・後転
  - ：両膝掛け後転=> 1/2 ひねり下り
  - ：後方浮支持回転
  - ：後方振り出しからの巻き付け（後方車輪の予備動作）
  - ：後方振り出し=>宙返り下り
  - ：=>足裏支持回転=>振り出し下り
  - ：後方車輪
- 吊り輪：肩や背の伸展運動（柔軟体操）
- ：懸垂振動
  - ：逆懸垂による振動（屈伸動作による）
  - ：脚前挙支持
  - ：肩倒立
- ぶら下がり器具：懸垂（両腕・片腕）
- ：懸垂姿勢で少しの振動（身体の反動を使って）
  - ：懸垂をしながら歩くような動作
  - ：支柱を使って後方へブリッジ
- 鉄柵（鉄棒や吊り輪の支柱）：肩や脚のストレッチ
- ：懸垂
  - ：登り棒として登る運動
- ベンチ 木製：肩や腰のストレッチ（後方へ身体を反らす）
- ：ブリッジ
- 石製：倒立

## 3) 特徴的な実施状況

知り合い4名は挨拶を行った、それ以外のひとは、挨拶は行わない、ひとり一人の運動はすべて異なっている、何も行わないで帰る人がいる、熟達者がいたが、他の人はそれを見ても何も言わない、自分の課題を行い、それぞれの時間で切り上げる、鉄棒以外の周辺にあるものすべてを運動に使用している。

## 4) 何が明らかになったか（観察者の解釈）

熟達者の行動の特異性が見られるものの、それに対する他者の反応はほとんど見られなかった。それぞれが自分の課題を淡々とこなし、帰ってゆくという光景は、どこまでも他者（個人に）干渉しないことのように思われた。

鉄棒の集団が維持されてきたことのひとつの理由であるかも知れない。課題とする運動は技が出来ること（技術）と体力（特に筋力）とに分けられるように思う。比較的時間の短い人たちは、筋力トレーニングのような感じで、身体を動かしているように思われた。また、運動前のストレッチを行っているが、準備運動としての色合いが強いものと感じられた。短時間の関わりでも、職場からここまで移動し、鉄棒に触れるという参加を、自己の身体管理のルーティーンとして理解しているのかも知れない。

## VI 日比谷公園の人たちの行動の意味は何か ～暫定的なまとめとして～

### 1 鉄棒クラブの映像から受けとるメッセージ

この映像を、大学の授業で使い続けており、その意図はふたつある。

生涯に渡って健康や健康な生活を続けてゆくための運動として、学齢期に学んだ器械運動（役立つとは思えない教材だと考える傾向にある）も役立つことがあるということ。これは、器械運動を何のために行っているのかを考えたことのない子どもたちがほとんどと言えるために、この映像から学べる第一の点と言える。

もうひとつは、このような自由なクラブ（組織）形態があるということを知ることである。運動を行う組織には、様々な形態があるが、通常、規則や形式に縛られ、身動きがとれないほど堅苦しさを作り出しているのが現状である。体育会という縦系列の社会や社会の中にあっても、企業化、産業化されたもので、すべてが金銭で解決するようなシステムである。そのような中、見ず知らずの他人が、集い、挨拶をし、自分の課題（行いたい運動）に取り組んでいる姿は、拘束の強い学校の授業や部活動、スマートなスポーツクラブで汗をかく姿とは、大きく異なるものと言える。東京という大都市の中に残された少ない自然（公園・鉄棒というのも人工的につくられたもののひとつではあるが、日比谷の屋外の雰囲気が独特なたたくまいをつくりあげている）の中の上半身裸になった大人の姿が、まさに、最後の自然の姿をつくっているように感じられる。「身体」こそ、残された最後の「自然」であるように、企業戦士の人々の仕事と、鉄棒する姿が、まさに、その格闘（葛藤）を物語っているように思える。

### 2 共同体とは何かに関連して

上記の意図の2つ目と関連して、次のことを考えてみたいということである。

西谷 修・山形孝夫氏の会話中の文章に、このクラブの姿を重ねてみた。

「人間は、一人ひとりが大事なのだ、フレンドなのだという考え方。国家も無用、男も女もない。異国人も異民族もない。ともに食べ、ともに働く、みんな友だちという考え方・・・、こうした考え方が基本であるような自由なコミュニティ。そしてここが大事なところですが、細かな規則はつくらない。・・・」

（山形）

「規則はつくらない、縛らない、排除しない、それで果たして共同体が維持できるのか。そのためには、人はもっと賢くなる必要がある。」（山形）

「何を共有しているか、それは実体的には語れない。しかし、ある『信じる』ということをおかち合っている、・・・」（西谷）<sup>13)</sup>

もちろん、3.11を通して感じた哲学者と宗教学者の会話の中に同じ意味を感じることは、できないかもしれないが、多くのコミュニティに足りないもの、理屈では割り切れないことがらに対して、感性的な表現で応えようとしている言葉に、鉄棒クラブとの同質性を見ることはできないだろうか。名刺交換から始まるひとの出会いとは異なった出会い、直接面と向かいながらのコミュニケーション、まさに、そこには社会的な

階層や権威といった拘束からは自由であり、自らの意思に従った行為・行動の様式を読み取ることができる。

### 3 鉄棒という文化財（運動財）の生き残り方のひとつ

鉄棒のルーツを考えたときには、様々なことが結びついてくる<sup>14)</sup>。自然の中の木々を渡り歩く動物を真似。木にぶら下がる動作。木の構造物へのぶら下がり。ある時代の馬どめ。木製品から鉄製品へと変化。ぶら下がりの遊び。遊びが競われ、出来栄えのくらべ合い。遊びのルール化。教育的な意図による利用。体力の養成に使用。軍隊も利用。様々な技術の発見と発展。今日的な器械運動の誕生。体操競技へ。

そして、学校体育の教材としても古くから行われてきており、現在まで続いている。

さて、小・中学校学習指導要領の器械運動の鉄棒に関する記載を見たい。

小学校1,2年生では運動遊びとしてとりあげられ、技能として「支持しての上がり下り、ぶら下がりや易しい回転をすること」があげられており、3,4年生では「基本的な上がり技や支持回転技、下り技をすること」、5,6年生では、「上がり技や支持回転技、下り技を安定して行うとともに、その発展技を行ったり、それらを繰り返したり組み合わせたりすること」が求められている<sup>15)</sup>。

一方、中学校1,2年生では「支持系や懸垂系の基本的な技を滑らかに行うこと、条件を変えた技、発展技を行うこと、それらを組み合わせること」、3年生では「支持系や懸垂系の基本的な技を滑らかに行うこと、条件を変えた技、発展技を行うこと、それらを構成し演技すること」<sup>16)</sup>が記載されている。

前述した鉄棒クラブのひとたちが行っている技は、学習指導要領に例示された技群とすべて一致するものではないが、クラブの人びとの実施バリエーションの多様性を垣間見ることができる。これは、果たして学校体育学習の成果とみなし得ることと言えるだろうか。

技の種類の比較を行ってもそれほど意味はないと思われる。例えば、学齢期に陸上運動で短距離走や持久走を学習した経験が、高齢者のジョギングやマラソンなどを支えていると言えるのか。同質の問題と思われる。運動経験は様々な記憶をつくり出している。楽しい記憶。苦しかった記憶。はるか隔たった時間の中に登場する「走り」は各自の様々な体験を通して、蘇るものと推測できる。まさに、個々の動機がそのようにさせるものと推測できる。したがって、運動の実施について、学齢期の運動学習の成果としてのみ理由付けることは困難であろう。しかし、記憶としては残されているはずである。その発動は、何によってもたらされるのか。ここでは語るができないが、それは個々の理由に還元されるものと思われる<sup>17)</sup>。

したがって、鉄棒も恐らく、同様な機序がはたらき、鉄棒クラブの人びとの鉄棒をする行為を意味付けているものと推測することが出来る。あくまでも仮説である。

日比谷公園で鉄棒をするひとたちを突き動かすもう一つの動機は、日比谷公園の場としての機能と考えることができる。大都会の真ただ中に出来あがったオアシスのような存在。現在の都市公園が完成するまでには幾多の変化があったことが知られているが、結果として、都市型公園の祝祭空間としてはたらきが公園に人びとを引きつけていると思われる。現在では、公官庁やオフィス街からの距離も近く、鉄棒という公園器具も安定的に設置されており、利用を助けていると言えよう。その場は、適度に公衆に開かれた空間であり、気持ちのいい雰囲気をも十分に持っている非日常的な空間である。この非日常性と勤務の日常との間を見事に橋渡しする公園の機能は、あたかも祝祭への参加、イニシエーション機能を自然と備えていたとも言える。サラリーマンたちは鉄棒への参加を一種のルーティンとして捉えることができるが、むしろ、非日常への突入という事態に遭遇すると解釈することが出来る。公園の鉄棒がひとびとを引きつける理由をそこに見ることができよう。

## 注 記

- 1) NHK TV 夏紀行「日比谷鉄棒クラブ」2004年8月放映
- 2) 新聞報道には2006年10月3日東京新聞「日比谷公園人間模様 24時体をきたえる「日比谷クラブ」の人たち、上半身裸になる人が多い」(インターネット版)や2007年3月7日産経新聞「大人のクラブ活動」(インターネット版)等をあげることができる。また、2004年から2011年にかけて、いくつかのテレビでは、話題としてとりあげられている。
- 3) これまで以下のような発表を行っている。  
2015年3月21日 北関東体育学会第2回大会(群馬)  
2015年10月3日 日本体育学会スポーツ経営管理専門領域研修会(東京)  
2016年8月24日 日本体育学会第67回大会スポーツ人類学専門領域(大阪)
- 4) 観察は全体や個々の行動を見ることができる場所からノートに逐次、書き取ることとした。その際、ビデオカメラ撮影は、参加者の行動に影響を与えると考えたため、用いていない。複数の同時に進行する行動もできるだけ書き留めるようこころがけたが、若干の見落とし・書き落としがあった可能性も含んだ記録である。
- 5) 2014年3月28日の朝の記録であり、初めての観察記録である。前日夕に仕事の転勤で日比谷を離れるひとの送別会を催しており、転勤者最後の朝の参加であり、別れの風景を見ることとなった。この日は、皆ではないが、上半身裸のひとが見られた。裸という行為に対して、後日聞き取り調査からは、2004年のNHKの放映後に、風紀上のことを考え、自然に自粛するようになったという話しをお聞きした。
- 6) A氏は74歳(この時点)、クラブへの参加年数は47年という。後日、最初の聞き取り調査を行った。港区に在住であり、合気道・自転車等、鉄棒の他にも多彩な運動を行っている。
- 7) 2014年7月31日の昼の記録。昼の時間帯を記録した最初のものである。
- 8) カッコに観察者の言葉を補った。
- 9) 東京での学会時に観察調査を行っており、その時のことを覚えていた方である。
- 10) 2013年8月22日に行った群馬大学教育学部での教員更新講習「スポーツを読む・見る」(福地担当)参加者の感想の一部。
- 11) 同上 別な参加者の感想の一部。
- 12) 2015年8月20日に行った群馬大学教育学部での教員更新講習「スポーツを読む・見る」(福地担当)参加者の感想の一部。
- 13) 西谷 修・山形孝夫(2014)「3・11以降この絶望の国で 死者の語りの地平から」ぷねうま舎 225頁～227頁
- 14) 稲垣正浩編、松本芳明・福地豊樹(1991)「先生なぜですか 器械運動編 とび箱はだれが考えたの?」大修館書店 所収(鉄棒運動 48頁～49頁)
- 15) 小学校学習指導要領解説 体育編 文部科学省 2008年8月 28頁、44頁、64頁
- 16) 中学校学習指導要領 保健体育編 文部科学省 2008年9月 41頁、49頁
- 17) この点に関する個人の聞き取り調査の報告は別稿に委ねたい。